

## 医学教育における医史学の現状と将来のあり方

松 木 明 知

医学の諸分野の中で医史学ほど医学史や医師学と誤解、混同され、その重要性が無視されてきた学問も少ない。その理由も種々あると考えられるが、一つには医史学自身に内在する地味さに加えて、研究対象の時代性、さらには現代の医学、医療との非関連性などが指摘されるであろう。

演者は過去二十年にわたって、弘前大学医学部において医学概論の一部としての医史学教育を担当してきた。当大学においては、医進課程第一学年の学生に対して、一〇〇分授業三十回の医学概論が行われている。この中、演者は医学史の部分で七回から八回講義を担当している。その内容はギリシャの医学について一回、ルネッサンス期の医学について一回、日本の医学の歩みが二回で、一つは日本の医学の通史、もう一つは日本における西洋医学の受容、中国とインドの医学が一回、世界を変えた薬が二回で、麻薬と大麻について、さらに感染との戦いの歩みが一回である。学生の反応を見たり希望を聴いて、テーマは同じでも毎年少しずつ内容を変えている。過去数年間の学生のアンケートに拠れば、演者の講義は医学概論の中でも評価が最上位を占めており、それなりの効果は挙げていると考えている。このことは演者が過去十年間札幌医大で医史学の集中講義を行ってきたが、毎年行われたアンケートでも演者の医学史の講義に学生が高い興味と評価を示していたことでも理解できると思う。

医史学が医学教育において極めて肝要である理由は、これによつてももの考え方、ものの観方を教えかつ学ぶことと

演者は考えているが、具体的には次の五点である。

- 一、医学の歴史つまり流れを知ることが、われわれが現在行っている医学、医療に対するより深い理解に役立つ。
- 二、医学の歴史を理解することによって、現代の医療に対する「病識」を持つことができる。つまりより良い医学、医療の方向を把握できる。
- 三、歴史つまり過去の情報を精査することによって新しいアイデア、新しい概念を創造し提唱することが可能である。
- 四、史的研究を通じて史的資料やその他の文献に対する読み方がより深まる。
- 五、正確な記録を残すことの重要性を認識出来る。

しかしこのような利点だけ列挙しても、多くの医学、医療関係者とくに医育機関としての大学における教官の多くは聴く耳をもたない。医史学研究者に対して外部から聞こえる批判の多くは、先年の医史学会の理事会で非公式に討論されたように、医史学研究の多くは単なるカビ臭い郷土史の研究に過ぎないという点である。これに対して演者は研究内容と現代の医療との接点を求めることによって解決が可能と考えている。

以上のような現況に対して、日本医学会の第一分科会である日本医史学会としても積極的な対応が望まれ、このシンポジウムの席上において具体的な提案を行いたい。

(弘前大学医学部麻酔科)